

横顔  
就任インタビュー



## 「まち」の強み生かし 連携で未来をつくる

60年超の歴史を有する高田病院が移転し、「キラメキテラスヘルスケアホスピタル」となってから、1年半ほどがたった。多施設が集まる「まち」で、新院長の上村章氏は、どんな病院運営を目指しているのだろうか。

医療法人玉昌会  
キラメキテラスヘルスケアホスピタル  
かみむら あきら  
**上村 章** 院長

1986年鹿児島大学医学部卒業。同大学医学部附属病院(現:鹿児島大学病院)、医療法人玉昌会高田病院(現:キラメキテラスヘルスケアホスピタル)副院長などを経て、2022年から現職。

医療法人玉昌会 キラメキテラスヘルスケアホスピタル  
鹿児島市高麗町43-30 ☎099-250-5600(代表)  
<https://www.kthc-hp.com/>

は働きやすくなったという声があります。鹿児島市での豪雨災害の経験から、1階を天井高6畳にしたのも工夫した点だ。2階以上への浸水を防ぎ、病院機能を維持する狙い。同時に、地域の災害医療の拠点としての役割を果たすため、物資の備蓄も進めているという。

### 健康経営で「働きがい改革」

経営母体である医療法人玉昌会は早くから、職員の心身の健康に配慮した取り組みをすることで経営面にもメリットを生み出す「健康経営」に重きを置いてきた。「健康経営優良法人(ホワイト500)」の認定を4回取得。医師や職員の働き方改革にも、健康経営の考えの下、取り組む方針だ。

「働き方改革は『働きがい改革』だと捉えています。職員の誰もがこれまで以上に働きがいを感じられるようにし、生きがいにも、人生における幸福にもつながる職場を目指します」

具体的な取り組みは、職員からの提案によって推進されている。例えば、「認知症患者の見守りが手薄になる時間帯があるので、早出の時間を早めたい」という要望に応えたり、コロナ禍で出勤できない職員が複数出る時に備えて、診療科の枠を超えた応援を可能にしたり。「職員の提案からは、

患者さんの役に立ちたい、患者さんのそばにもつきたいという気持ちを感じることも多く、非常にうれしく思っています」

業務効率化を目指して導入した電子カルテについても、現場の意見を取り入れながらさらにアップデートしていく予定だ。

### モデルケースへの発展を目指す

2病院の他、ホテル、商業施設や分譲マンションなどが集約される「まち」で進む連携の事例には、全国から注目が集まっている。

「まち全体での地域包括ケアを進め、具体性を持って事例を発信していくことも、私たちの使命の一つになると考えます。まずは、いまきいれ総合病院での急性期治療を終えた患者さんを当院でしっかりと受け入れ、急性期病院のベッドが確保できる状態を維持すること。タイムリーに受け入れる連携づくりをこれからも続けます」

### 急性期と慢性期の2病院が隣接

キラメキテラスヘルスケアホスピタルは、病床数198床を有し、回復期・慢性期から在宅医療・介護までを切れ目なく提供している。急性期医療を担う、公益社団法人昭和会「いまきいれ総合病院」が隣接。

2病院の経営母体は異なるが、2階の渡り廊下でつながっており、職員や患者が行き来できる。「急性期から在宅医療まで一貫して対応できる医療体制構築を、2病院の共同で実現することを目的に、緩やかな連携を図っています。別法人の病院が渡り廊下でつながるのは全国でも珍しい試みです」

設計上の特長はこれだけではない。スタッフステーションを病棟の中心に配置する「ゼロ動線病棟」により、両側の病室への動線を最短にした。「死角が少なくなり、患者さんの異変や徘徊(はいはい)にすぐに気付けるようになりました。以前より外傷数が減るなどリスクが下がったため、職員から

2022年4月には、脳卒中や脊髄損傷後のリハビリテーション治療として知られる「促進反復療法(川平法)」の提供が始まり、県外からの患者が増加。23年春にはキラメキテラス内の一角に「シエラトン鹿児島」も開業する。「国内外からの医療ツーリズムの広がりにも期待しています」